

中学年部会 実践事例

富山市立長岡小学校
指導者 米田 貴子

研究主題

自ら課題を見付け、主体的に追究し、自分の生き方を考えていこうとする子供の育成を目指す「総合的な学習の時間」はどうあればよいか。

1 単元名 わたしの体、すこやか大作戦 Part

2 単元の目標

- ・ 自分の体と心を見つめ・調べる活動を通して、自分自身の成長に気付くとともに、健康の大切さを実感し、主体的に健康な暮らしをつくっていこうとすることができる。
(健康、自己の生き方)
- ・ 自分の課題を見直し、修正したり発展させたりすることで、より深まりのある課題を見付けることができる。
(課題設定の能力)
- ・ 解決の見通しをもっているいろいろな方法で調べ、収集した情報を整理して、自分なりの考えをもつことができる。
(学習への主体的・創造的な態度)

3 単元について

(1) 単元設定について

日本は世界一の長寿国と言われ、だれもが人生80年を健康に生きることを望んでいる。健康グッズや健康食品など、健康に関する様々な情報が溢れ、健康への関心が高まっているのも、そうした人々の願いの表れであろう。ところが、食生活の欧米化やファーストフード化、狂牛病騒動に見られる食への安全の問題など、人間が生きるために必要な「食べる」ことが健康を損なう原因の一つになることがある。また食に関連して、室内遊びの増加による運動不足や夜型の生活による睡眠不足など、生活習慣の変化が生活習慣病の低年齢化傾向を引き起こしている。さらに、ストレスや心の問題が体に影響を与えたり、自他の命を軽視する事件が起こったり・・・と、子供たちを取り巻く環境は、健康的であるとは言い難い。だからこそ、これからを生きる子供たちには、自分の力で未来を切り開いていく強くたくましい心と体や、「健康は自らつくるもの」という認識にたって積極的に健康な生活を送ろうとする態度を身に付けさせることが大切である。

4年生という発達段階は、個人差はあるものの体が大きく変化し始める時期である。また、保健学習「育ちゆく体とわたし」の単元では、体の発育・発達について学習したり、4年生対象のすこやか検診を受けたりするなど、自分の体への関心が高まる時期でもあるので、この機会に健康についての学習を展開することは、意義のあることだと考える。

(2) 児童の実態

明るく元気で、体を動かして遊ぶことが好きな子供が多いが、なかには太陽の時間に行っている週2回の全校マラソンにしぶしぶ参加している子供もいる。また放課後は、スポーツ活動に参加している数名を除くと、ほとんどの子供が家の中で過ごしており、運動に十分親しんでいるとは言えない。それから、食事に関して「 を食べると～にいい」とか、睡眠が大事だとかいうことを頭では理解していても、実際に給食で好き嫌いをしたり、寝不足で登校したりしている子供もいる。そのような生活習慣を裏付けるかのように、4年生対象の「すこやか検診」では、「コレステロールや中性脂肪の値が高かった子供が、22人中9人(41%)」という心配な結果が出た。それは、病気になって初めて健康の有り難さに気付くけれど、普段は

健康ということをほとんど意識せずに生活しているため、健康に関するいろいろな知識が自分自身にとって切実なものになっていないためであろう。だからこそ、心身の健康の大切さや健康の保持増進の必要性を、子供自らが体験活動を通して学び取っていきけるようにしていきたい。

素直で課題に対して一生懸命取り組むが、自分で興味のあることを見つけて課題をつくっていく力はまだ十分育っていない。そこで、1学期には自分の健康について見つめる「自分ウォッチング」を共通体験として設定した。そしてその体験活動で感じた一人一人の疑問や驚き、願い等をもとに、自分の課題を見付けることができるようにした。ところが、「自分ウォッチング」で得た、自分の健康についてのたくさんの情報を関連付けて分析し、「どうしたらより健康になれるか」について、自分なりの考えをもつことが難しかったようで、『友達と比較して劣っている事実＝自分の課題』としている子供が多かった。そこで本単元では、1学期の課題を見直す場を設定し、じっくり時間をかけて、一人一人が自分にとって切実感のある課題を見付けることができるようにしていきたい。また、調べ活動になると、手軽なインターネットに頼る傾向があるので、いろいろな調べ方のマニュアルを配布し、子供たちが自信をもって多様な方法で情報を収集できるように援助したい。そして、分かったことを整理してまとめる活動や友達とかかわり合う場を単元の中に効果的に位置づけ、自分なりの考えをもつ力やそれを伝える力を育てていきたい。

4 研究主題との関連

仮説1 子供の心をゆさぶる場を工夫して設定することによって、子供たちは自ら課題を見付けたり、自分の課題を見直し発展させたりすることができる。また、そうした学習を積み重ねることで、課題を設定する力を高めることができる。

子供たちは、自分にとって興味関心のある課題を見付けることができたとき、主体的・意欲的に問題解決に取り組む。その追究の原動力となるのが、知りたい・やってみようといった思いや願いであり、それは驚きや疑問、感動等で子供たちの心が動いたときに生まれる。

そこで、子供の心をゆさぶる場として、

(1) 自分の課題を他とのかかわりの中で見直す場

(2) 地域の方の生き方にふれ、自分の課題を深める場

を工夫して設定し、新たな問題意識をもったり自分が決めた課題の不十分さに気付いたりできるようにしたい。つまり、一度課題を設定したらそれで終わりというのではなく、追究を進めていく中で自分の課題を見直し、より深まりのある課題へと発展させていく学習経験を積み重ねていくことによって、課題を設定する力を高めていけると考える。

仮説2 子供の追究の歩みを的確に把握し、学びの連続を生み出す評価を工夫することで、子供たちは自信をもって主体的に追究することができる。

個に応じた支援をしていくには、一人一人の実態をしっかりと把握し、その子供にとって何が必要か見極めることが大切である。また、よさを認められたことによる自信や喜びが、次の活動へのエネルギーになり、子供たちは自信をもって主体的に追究していきけるのではないかと考える。そこで本単元では、一人一人の意欲を引き出し高めたり、見通しをもたせたりする評価として、

(1) 自分の学びを見つめる自己評価 …… 「ふりかえりカード」「総合あゆみカード」

(2) 一人一人の追究の歩みをとらえる評価 … 「個人カード」

(3) 家族や地域の方からの評価 …… 学習発表会、アンケート

を、子供たちの学びが連続するように工夫して活用していく。そして、主体的な追究を支え促すものとしての評価はどうあればよいのかについて、検証していきたい。

